

第4章 チャームスクール

—いわば自然に向けて鏡を掲げる、美德には美德の姿を、
軽蔑すべきは軽蔑の姿を、つまりは当代の実態そのものを、
姿かたちそのままに映し出すことにある。—

1954年秋、ハリウッド、ある土曜の夜、私はその時21歳でした。その夜が私の狂気の夜になるとは思いもありませんでした。

私はその夏を、ニューメキシコのアルバケルクとサンタフェにあるサマーハウス劇場の契約監督・主演男優として、過ごしたばかりでした。そのシーズンのレパートリーには“ミスター・ロバーツ”“第17収容所”“カクテルパーティ”“アイアムアカメラ”、“ライトアップザスカイ”そしてピュリッツア賞を受賞した“ヘルベントファーヘブズ”、その劇で、私はラフェ・プライヤー、宗教的な精神異常者を演じたのですが、それらが含まれていました。

私の乗っていた車が、カフンガ峠に差しかかったころは、その夏の緊張感と疲労感がまだ私の中で激しく渦巻いていました。私は戦前のコンバーティブルの後部座席にテッド・マークランド、若いコメディアンを左にそして、ジェームズ・コバーン、LACCの級友を右にして座っていました。

そしてその時、暗闇の中でジムが低いバスで言ったのです。「おい、リラックスしろよ、ちょっとこれ吸ってみろよ」と。

私は1940年代ミネアポリスに住んでいたころには、マリファナに遭遇したことはあります。日曜の午後よく高校の友人ジョン「ヨギ」ランドルが、オルソンハイウェイのジャズ演奏会へ連れて行ってってくれました、そこで、1ポイント入りのガッケンハイマーウィスキーを分け合い、黒人演奏家（当時はニグロと呼んでいました）物悲しい演奏をするのを聞いていたものです。そしてときどき、周りにいる人たちが、リーファーズ—マリファナたばこを吸って

いました。しかし、私にすすめられた時にはいつでも、ウィスキーボトルをさして、いらない、とパスしていました。

そして、数年たったその時でも、私はどうやってそれを吸うのかは、全く知らなかったのです。私はジムがくたびれた感じのタバコを吸い込むのを、注意深く見て、彼がしたのと同じようにやり、そしてそれをテッドへ渡しました。もちろん、私は真ん中の男、両方へ渡す都度吸うこととなりました。

私たちが目的地に着いた時、私は中に入る前に一人で少し車に残りたいと言いました。そして、彼らは私を一人残しました。。。

間もなくほとんど直ぐに、私の周りを波の音を取り囲みだしました。私はいつも水を恐れていたのです、今この薬に冒された状態では、溺死が差し迫っていると確信しました。

そして別の感覚が私の意識を満たし始めました。体が浮き上がっている感覚ですーはじめはゆっくり、そして次第に速くーその間中、私は車の後部座席に一人で座っているのを分かっていました。

私は、もし私が車の座席をよじ登って前部座席に行き、腕をハンドルの下のバーにロックさせ、上腕でハンドルの上部にしがみつけば、私は浮き上がりずには大丈夫だろうと考えました。そして、どうにか、できるかぎり早くそれをやった方がいいと納得しました。それで、ぐに前の座席に飛び込み、腕をしっかりと絡めました。

しかし、私が体の下半分をハンドルの下に滑り込ませると、突然、スクルージのドアに現れたマーレイの亡霊のような、陰湿な悪魔のような顔がハンドルの輪の中にあらわれたのです。それは笑って私を手招きし、そして下を見ました。

私は意識の中に残っていた気持ち全てを変えて、私自身を浮遊させることに決めました。

私がハンドルから手を離すと、波と風は嵐のように吹き荒れ出し、車を激しく叩きはじめました。霰、霰、雪がそれに加わりました。それと同時に悪魔のイメージがはっきりとし始めました。悪魔はユダの痛めつけられた肉体を掴み、耐えがたい大声で叫んでいました「神を裏切ったこやつを觀ろ、そして懺悔しろ、出来るか？出来るか？」と。

私はぐったりと座席に寄りかかりました。私の思いは、セントアン教会のバーソオロミュー神父のカソリックの授業に、漂いつきました。私がいかに神父と死後の世界、地獄、煉獄、罪、天国そしてその他のことについて議論し合っただろう。私は目の前の顔に叫びました「懺悔などできない！私は何も悪いことはしていない！何故私は、死ななくてはならないのか？私はまだ若い。まだまだすべき事が沢山ある！」

その時には、波は私ののどに注ぎ込み始め、水が炎を消すように、私の叫びをかき消していました。ハンドルに浮かんだ顔はキリストの敵で、私はこいつを地獄へのガイドとして、最後の審判を通っているのだ、との思いが浮かびました。その時起こっていたであろうと、それは減少して行くどころか、益々大きくなり、のしかかってきました。私の周囲の全ての感覚と音が、私の体と心が爆発しそうなくらいまで強まりました。

これが私の疑った地獄なのか？これは私がバート神父の説諭を信じなかったことへの罰なのか？それとも彼は本当に私を誘惑するメフィストフェレスの別の姿なのか？全ての昔の疑問が新しい疑問とともにさまよい戻ってきました。私は思いました：私は懺悔をすることが出来ないから、仏陀の眼の中のように、永遠にリンボ（地獄の辺土）として残るのか？あるいは、私が何をしようとも天国が約束されるのか？もし、思春期直前の私の心に詰め込まれたセントアン教会での説教の全てがたわごとだったらどうなる？

その大混乱の中で私が確かに思ったことは、私は死にかけている、そして誰一人として私の肉体もさまよえる魂を救いには来てくれないのだ、ということでした。だから私は再び「懺悔はできない！」と叫びました。

そうすると、私がまだ地獄に落ちていないことを確かめるかのように、寒さが襲いました。凍てつくような、鋭い寒さ、一番寒い街と言われるミネアポリスでも経験したことのないような寒さでした。私の眼は氷と風でふさがれました。私の手足は野蛮な発砲のようにバリッバリッ音を立てました。私の体は痙攣し、風と波が荒々しくとどろくと、硬直しました。そして、突然静寂が訪れました。

私の目の前のフロントガラスに6つの顔が現れ始めました、はじめはぼんやりと、そして徐々にはっきりとしてきました。私はゆっくりとひとつ、ひとつを確認しました。

皆、私の十代後半に亡くなった人たちで、わたしが立ち会ったか、亡くなったと聞いた人達でした。

ビビアン、彼女のブロンドの美貌は交通事故の恐怖で無茶苦茶に歪み。

リチャード、彼のハンサムな包帯に巻かれた頭は脳腫瘍で腐敗しており。

フランク、私の祖父は木の椅子に座り一人さびしく亡くなり、口から吹き出した泡は床まで伝わり落ちていた。

おばあちゃん、病室で一人、肺炎でのどをぜいぜいさせながら亡くなり、

ウォルター・ヴォーン、私の父、バルバドスで一人47歳、リウマチ性心疾患でボロボロになり死亡。

そして、ジョン・コナー、私の尊敬する継父、慈善病棟で一人、飲酒が原因で39歳で死亡。

彼らが皆私のそばに居ました、でも何故か私はまだ一人でした。

その静寂と恐ろしいほどの悲しみの瞬間、私は再び4才に戻っていましたが、私はミネアポリスのノースコモンパークの屋外ステージに立っていました。母が私の前にいて、私の話す言葉に嬉しそうに微笑んで見つめています一母が私に教えたあの言葉「見知らぬ国、どの旅人ももどることのない」

そしてまた現在にもどり、またその前に私に起きた全ての狂気が始まりました。私は叫び、そしてまた叫びました。もうこれ以上叫べないと思ったとき、また叫びました「懺悔はできない」

まだその場で凍えながら、パニックで私の右へ、左へと体をひねりました。私は永遠に一人でその車に閉じ込められると確信しました。

その時、私の右側で突然の爆発音が私を襲いました。私の名前が何度も何度も繰り返し呼ばれていました、でもそれは私の名前ではありませんでした。それは「ロベルト、ロベルト！頼むからやめろよ！警官を呼び寄せてるぞ！」

それはジムでした、私を車から引きずり出そうとしていました、私を覆い、取り囲んでいた狂気から完全に解き放たれるまで、私を引っ張り、私と取っ組み合い、言いくるめようとしていました。

テッドもすぐにあらわれて、二人で一緒に、まだ恐怖におののき、疲れ果て、半分昏睡状態の私を夜へ引きずり出し、彼らがリラックスしてハイになるために行ったアパートに連れて行きました。

ジムが「中に入れよ、音立てるんじゃないぞ。近所中で気違いを探しに出てるんだ」と言いました。私たちが中に入った瞬間に、私は古い汚いソファに倒れ込みました、私の災難からまだ震え、汗だくになりながら。ジムが「シャワーをあびて、落ちつけよ、近所の人たちがいなくなるまで電気を消すからね」と言いました。

水が私に当たると、波の感覚がまた蘇りました、そしてだんだんと前の気違いじみた感情が始まりました。私がなにかに集中できれば、特に言葉に、多分狂気のサイクルからなんとか逃れることができるのではないかと考えました。私は薄明かりのシャワー室のコーナーに低くかがみこみました、そして、お湯が私の肩を包みだしたときにつぶやき始めました、「生きるべきか死ぬべきか。。。」波は続きましたが、私が「それが問題だ」と続けたので、強まることはありませんでした。

もし、私が叫び出すことなくこの独白を終えることができたなら、多分この恐怖は戻ってこないのだろうと考えました。私は「旅人が二度と帰らぬ未知の国」まで続けることができ、それが終わるころには私の魂は全て静まっていました。

其の夜、私は何度もシャワーに行ったり来たりしました、そのたび私の呪文であるハムレットを唱えました。そして、やっとジムがファンテンアベニューの彼のアパート（ゼヴ・バフマン、後のブロードウェイプロデューサーとシェアしていた）へ連れ戻したのです。

私は誰か録音機器を持っていないか、尋ねました。そこに住んでいた別の友人がテープレコーダーを持ってきてくれました。そしてその夜私の経験した全てを録音しました。後でそれを紙に書き出し、記録としてその後ずっと残しておきました。

その夜から数ヵ月の間、予期せぬときに昼でも夜でも、その波と恐怖がよみがえりました、そのたびに、私はその独白のお守りにすがりました。私が「二度と帰らぬ。。。」のところに差しかかる頃には、私は静寂と安心を取り戻し、私の苦悩に苛まれた魂も落ち着いたのです。

その事件からほぼ1年後、私はあるパーティーで、ある精神科医にこの経験を詳しく話す機会がありました。彼は言いました、「ロバート、僕には君が超過速度的に、薬によって、精神的な破壊の限界ギリギリの、神経衰弱を誘発されたと、聞こえるね。」

「それは一体どういうことを意味しているのですか？」と知りたがりました。彼はこう答えました。「まあ、君は障害が一生残ることが無くて、とてもラッキーだったと言っておこう。何人かの人は一息が狂ったままなのだよ。」先生の心配とは反対に、あの夜の狂気への旅は私を良い方へ変えました。それまで、私は、俺、俺、俺、自分、自分、自分、俳優として成功するための自分の欲望以外、他人のことについて考えることなど殆どなかったのです。しかし、その後は他の人の感情についてより深く思いやるようになりました。

更に重要なことには、私は自分の周りのもっと大きな世界に、目を向けるようになりました。私は将来、何故自分がここに存在し、何故この疾走する球体に係留されて残ることを選んだのかを学ぶための時間を、取らなければならないと心に決めたのです。

半世紀以上たった今でもなお、時々、いくつかの出来事があの夜に感じた恐怖を呼び起こすことがあり、そして、すぐに消え去っていきます。

ジム・コバーンがあるとき私に言ったことがあります。「あのさ、ハイを経験したことのある奴は皆、そういうような経験を求めているのだけでもね、君が支払った代償のようなものほどではないんだよ。あの夜君の顔に浮かんだ恐怖ほどのものは、今まで一度も見たことがないよ。」

ジョーン・ディディオンの書いた「ザ・イヤー・オブ・マジカル・シンキング」の中で、彼女は「狂気の浅はかさ」について述べています。私には彼女の言っていることが理解できます。言うまでもなく、60年代にマリファナ文化がやって来た時、私にはなんの興味もわきませんでした。

1956年の春、「エンド・アス・ア・マン」が終演し、そして映画演劇の全ての世界が私の専門分野となったとき、私は「プレーヤーズリング・アクティ
ングクラス」の先生をすることを頼まれました。当時そのクラスは私の親愛な
る友人、ジョー・フリンが教えていました。ジョーとは彼が「ザ・ピルグリム・
プレイ」でジェイコブ・ジョセファット、寺院の両替やを演じた時に会いま
した。ジョーはコメディの達人で、舞台・映画の両方ともに素晴らしく、のち
に「マックヘイルズ・ネイヴィー」という人気番組のスターになります。（こ
の番組は同じ時間帯の人気番組に対抗して結構長く続きました。そのもうひと
つの人気番組とは—0011 ナポレオン ソローでした。）私を大いに笑
わせてくれる人であれば、だれでも気に入ってしまう、私の良い例です。彼が
演技をしていない時は、ジョーはカリフォルニア州の仕事をしていました、そ
れで彼は車を無償で与えられていました。でも彼の仕事は何なのかは決して話
してくれませんでした。

ともかく、ジョーはその「プレーヤーズリング・クラス」で教えていました。
しかし、休暇をとって留守にするので代わりが必要だったのです。私はジョ
ーのことを知っているの、彼がクラスで教えていることが何であろうと、絶
対に誰か他の人の方法は使っていないであろうと認識しました。ジョーの演技
の理論はとても単純なものです：どのような方法をとろうとも、台本が求めて
いることをすること。例えば、もし舞台上で泣かなければならぬなら、生玉ね
ぎをカットしたものを帽子に入れてかぶりなさい、です。スタニスラフスキの
感情表現理論もこれまででした。

しかし、ジョーの演技理論と私のとの不一致にも拘わらず、私は喜んで彼の
代役を引き受けることにしました。私は演技を愛していましたし、その演技を
教えるのも楽しかったのです。

実のところ、私は弱冠18歳のときに初めて教える仕事をしていました。1
951年の秋期、ミネソタ大学で、KUOM ミネソタ放送学校のディレクターだ
ったベッティ・ガーリングが私にラジオ演劇の「スピーチ101」クラスで教
えるように頼んだのです。私はそれを喜んで自信を持って受けたのです。

その時点では、私はすでに芸術としての演技について深く考えるようになっていました。その昔の40年代に私の継父と母がブランド（彼は母の知っているカメリタ・ポウプという女性とデートしていました。）や、リー・ストラスバーグ、ボビー・ルイス、シェリル・クロフォード、そしてのちにエリア・カザンが経営するアクターズスタジオ、そして彼らの用いる役作りのためのスタニスラフスキ システム理論に気づかせてくれていました。コンスタンチン・スタニスラフスキとウラジミール・ネミロヴィッチは世界的に有名なモスクワ芸術劇場を創設しました、その作品を私は1964年の冬に初めてモスクワを訪れた時にみることになります。

私はスタニスラフスキという名前に、1947年の夏、シカゴで初めて出会いました。私の継父、ジョン・コナーが、ジャン・スターリングが主役のビリー・ドーンを演じたナショナルカンパニーのガールソン・カニン「ボーン・イエスタディ」で、ハリー・ブロックの代役をやっていたのです。（ビリー・ドーン役はブロードウェイと映画でジュディ・ホリデイが演じてオスカーを受賞しました）

母とジョンは夏の間、ノースレイサル通りにあるベラ、デビッド・イトキンズのアパートをまた借りしてしていました。イトキンズ夫妻はシカゴのあの有名なグッドマンシアター、そこで私の妻リンダものちに演劇を学びました、と関係がありました。彼らはソビエトに行っていて舞台演劇に関するロシアの本の英訳本の図書、特に演技について、を残していました。スタニスラフスキの「俳優の下準備」はその夏の私のバイブルとなりました。1948年に、私は自分で、スタニスラフスキの「俳優の下準備」10版記念本を購入し、今日に至るまで保有しています。

1951年の秋のその大学で、私は生徒たち、ほとんどが私より少々年上でしたが、に役者としてマイクの使い方の基本的な技術を教えた後、私が40年代半ばにシカゴで学んだメソッドを使ってラジオ演劇のちょっと変わった方法を探しようとしていました。それは、上手いきませんでした、それが未熟な指導者の失敗のせいなのか、あるいはただ単に私の生徒たちの関心の無さゆえだったのかはわかりません—多分両方少しづつではないかと思いますが。

しかし、私の芸術としての演劇に魅了された状態はさらに培養され続けました。私はその時代の偉大な演技を大いに楽しんでいたので、1948年のローレンス・オリビエの「ハムレット」から1952年のブランドの「欲望と言う名の電車」まで。私は、1954年にミハエル・チェーホフに会いました、彼はステージソサエティで当時の講師であり、崇拜されている人でした。私は21歳になったばかりで、そのグループで一番若いメンバーでした。

私の大学の友人、ハリー・フィシュバック、今は作家でトロントのテレビディレクター、が私がステージソサエティへの参加が許されると伝え聞いて、1954年7月、チェホフの「俳優へ」という本を彼が個人的に署名をして私に贈呈してくれました、それも今日にいたるまで保有しています。私はチェホフの指導を吸収し始めました、直接そしてジェフ・コレイ、戦後にブラックリストに載せられたステージソサエティのメンバー、とジャック・コスリン、私が入団を許可されたときのソサエティのメンバー、の影響を介しながらです。彼ら二人は「チェホフ演技技術」の生徒でした。

「男としての終わり」の最後の週に、私はジェフのところへ私の演技を、当時の私にとっては一そして恐らく永遠に一最高の出来、であったものをどのように腐らせないようにできるかヒントをもらいに行きました。ジェフとジャックはミハエル・チェーホフについてうやうやしく語り会いました。

1955年春、私は、ジェームズ・ディーンがその夜の演技クラスにゲストとして招かれた、ジェフの記念すべきクラスにも出席していました。ジェフはジミーに彼の演技の相手役に、飲酒をやめるように説得するのを、即興でやるように頼みました。ジミーが数ある選択肢から選んだのは、彼自身が酔っぱらい、それを見せることで、決して言葉ではなく、相手役に他の人が素面の時に、酔っぱらうということがどんなにみっともないことであるかを見せつけたのです。

彼の即興の演技はそれは素晴らしく見事でした。不幸なことに、その年が終わる前、1955年9月30日に、24歳という若さで、ジェームズ・ディーンは交通事故で亡くなりました。偶然にも、その日の数時間後、ミハエル・チェーホフも禁煙をするように警告されていたにも拘わらず、煙草に火をつけようとしているときに後ろに崩れ落ちました、心臓発作による死でした。

これが、その時の1956年夏のプラーヤーズリングの演技クラスで私が教えるために活用した私のバックグラウンドです。

ジョー・フリンのクラスには将来有望な俳優たちが混在していました。何人かは特にとても有望でした。後に映画「マッシュ」で一気にスターになるサリー・ケラーマンはその一人でした。もう一人は「チャイナタウン」でオスカーの脚本賞を受賞するロバート・タウンです。タウンは俳優になりたかった訳ではありませんでしたが、演技という技能がどのように作用するのか、そして、俳優にとってどうすればよりよいシーンになるのかを学びたかったのです。

そしてそこには、長身でハンサムで、配役をする人に「コメディには背が高すぎる」と言われていたポール・ブリネガーがいました。彼はクリント・イーストウッド主演の「ローハイド」の陽気な料理番ウッシュボーン役で大成功をします。

私のその夏のガールフレンドも、私のその日曜の午後の授業を良く見学に来ていました、しかし、そこで即興で演じて見ることはありませんでした。彼女はナタリー・ウッドであることでとても忙しかったのです。

そして最後に、ニュージャージー出身のちょっと変なアクセントと独特の声の持ち主の若いハンサムな色男がいました。ジャックが「バスストップ」の1シーンを演じようとし、しかしなにか自信がなく、リラックスしてそれをやり通すことが出来なかったのを覚えています。ジャックの自分自身に対する自信の問題は驚くほど長く続きました。1967年の早秋のある午後、ジャックが私のMGMの控室の床に座り込んでいたのを思い出します。彼はビールを飲み込むと宣言をしたのです。「ヴォーニー、僕はあと2年だけやってみよ、それでだめなら他の職業を見つけるつもりだ。」と。

「ちょっと待てよ、ジャック。あきらめるにはまだ若すぎるよ。」と私は、彼に言いました。

2年後、彼は演技というものをどうするのかを見つけ出し、彼の技術を「イージーライダー」で世界に示したのです。彼の名はジャック・ニコルソン。彼は他のどの男優よりもオスカー候補になり（12回）、3回受賞（男優としての記録）しています。

授業を始めるころには、多分その年の終わりまでには私が兵役に徴収されるであろうと思っていました。それゆえに、私の授業が複雑になりすぎるのは避けたかったのです、ですから、生徒たちをロシア演劇理論、ストラスバーグ理論などの演技理論の海を漂わせることにしたのです。しかし、私がチェーホフから学んだことには強調を置きたかったのです。

明らかにそれは失敗したようです。1998年ジャック・ニコルソンが「恋愛小説家」でゴールデングローブ賞を受賞した時（彼はほぼこの役を降りようとしていた）に彼は「私は振り返って、私が、監督が私が新たにミハエル・チェーホフの心理描写ジェスチャーを身に付けたことを楽しんでいるのを、見るのを想像しました。」と述べたのです。多分それはジャックが私の授業での時を後に思いだし、私の忘れられない授業のスタイルに対する感謝の気持ちだったのかもしれませんが。（もちろん、彼自身チェーホフの本を持っていた可能性もあります。）

「心理描写ジェスチャー」の精霊を解放してしまったので、この機会にチェーホフがこの表現によって何を意味したのか私の考えを説明します。それを解説するために、私の一番精通する2つの劇：「ハムレット」とアーサー・ミラーの「橋からの眺め」：に焦点をあてようと思います。さらに、私が演じたニール・サイモンの大成功した（財政的に）現代喜劇「おかしな二人」にも触れたいと思います。

私が1960年に「橋からの眺め」を監督したときには、LASCのプロデューサーと、プロの俳優が主要な役を務め、在学生在が脇役をすることで同意をしました。私は主役にアンソニー・カーボン、偶然にもエディ・カーボン役、ジェームズ・コバーンを極めて重要な役の弁護士、アルフィエリ役：そしてキャロリー・キャンベル、ジョン・ハケット、ミネット・キングらを他の主な役に配役しました。この戯曲はミラーの書いた作品でもっともギリシャ悲劇に近づいたものです。コバーンのアルフィエリの完全なる口上とともに。

更に重要なことに、プロデューサーは私のセット、衣装、小道具をリハーサルの日から用意するという要求に同意してくれたのです。（これは実質的にはあり得ないことです）チェーホフの心理描写ジェスチャーを舞台で行うためには、エディー・カーボンの労働者階級のニュージャージーのアパートの実際

のセットをリハーサルの第一日目から用意して雰囲気を作ることが大切だったのです。俳優・芸術家にとって、セットによって作り出される雰囲気は、音楽における調にも匹敵します：キャストはその雰囲気を、音楽家たちがあるキーによって特徴的な質を具体化するように感じ、そしてそれを具体化しなくてはいけないのです。

これが起きるとき、心理描写ジェスチャーが自然にかつもっともらしく現れるのです。その表現はいくつかの事柄に帰するのです：俳優の実際に目に見えるジェスチャー；俳優のセリフに込められた目に見えない（潜在的な）ジェスチャー、そして両者を高めていく感情です。

この3つ全ては密接につながっているのです。人間あるいはその劇の人物が何かを「考え」、あるいは「感じ」、あるいは「願う」、のはこれらの衝動的な行動が、ある特有な時に勝ち得てくるものでからであると言っています。しかし、3つの機能全てが、それぞれの心理的な瞬間に現実に存在し活発に活動しているのです。 そのように、私たちは考えることなしに、肉体的な活動を伝えている間に、感情を表す言葉を使います：“結論を導き”、“安心を与え”、“無気力に陥る”、あるいは“喜びに飛び跳ねる”のです。思考が先に立ち、願望を助長する、そして願望は行動を助長する。そして、演技が最大に力を発揮するときには3つの要素が全て含まれているのです。レオナルド・ダビンチが書いたように「魂は肉体に宿ることを望む、なぜならその肉体そのものがなければ行動することも感じることもできないからだ」（無神論者はこれ以上読むに及ばぬ）と。

私たちの周りに完全なるセットがある環境のおかげで、「橋からの眺め」を劇化して行く作業は、全てのキャストが私たちの意図に応じた心理的ジェスチャー—脚本家の構想を具体化するために、感じ、願い、演技する—を見つけ出すのを容易にしました。（私は今もこの時の監督の台本をもっています、その余白は親チーフホフ派専門用語を含む私の走り書きで埋め尽くされています。これは私の監督としての一番の出来でした。）

もうひとつの例として「ハムレット」第一幕、第一場、亡くなったハムレット王の亡霊が2回目に現れたところへ移りましょう。

ホレイショーが言います。

>>よし、来い、崇らば崇れだ、止まれよ幻影。

お前に声があるのなら、言葉を発しうるものなら、
わたしに話してくれ。

なにかこちらになすべきことがあり、それが
お前には鎮魂を、私には恩龍をもたらすと言うのなら
どうか話してくれ

(鶏鳴)

我が国の将来の命運をお前がひそかに予知して、
幸いにもこれを知り得た我らが未然に防げるものなら
どうか話してくれ <<

(研究社：シェイクスピア選集：大場建治著より引用)

ミハエル・チェーホフによれば、俳優の想像力ではホレイショーは彼の語りから、精神的に興奮し、狂気の状態であると考えられるかもしれないという。さて、その主な原動力はなんであろう。ニュアンスではない。彼は確かに亡霊に向き合うであろうし、多分上へ向かって届こうとする光景になるであろう（ほとんどのハムレット作品では舞台後方の高い所に立っている）。観客は初めて堂々とした永遠な形での号令を見ることが出来るのである。おそらくホレイショーの腕は広げられ、顔は下むきに亡霊に向い、観客からは遠ざかっている、俳優の体で、未知なるものの存在を、解き明かそうしている。この種の心理的描写ジェスチャーは確かにシェイクスピアの言葉にふさわしく関連づけられるであろう。

「仮に言葉を発することが片方の手にプラスチックを作るものであるなら、もう一方は音楽であろう」オーストリアの哲学者ルドルフ・シュタイナーが言っています。「そして、これがなによりもはじめに、ジェスチャーをスピーチへ持ち込んでくることが考慮されるべきなのである。ハムレットのこのシーンは、単純だが彼が意味し、どのように舞台に反映するべきかという鮮明な例である。

最後に受け身の心理描写ジェスチャーについて触れて見ましょう、これは事実上私自信の考え方です。荘厳なものから馬鹿馬鹿しい物へ移すため、1969年セントルイスでの「おかしな二人」の私のリハーサルを例にとります。

監督はコレイ・アレンでかれには1952年秋にUCLAで会いました。私が彼に会った時には彼は”ザ・ジーザスコップ”の主役をしていました。後に1955年「理由なき反抗」でジェームズ・ディーンの敵役で登場します。かれは二人の青年が、どちらが崖に当たる前に早く車を止めれるかを争ってレースする重要なシーンで亡くなる役でした。

セントルイスでは私はオスカー・マジソン（ずぼらな奴）を、私の長年の親友シャーウッド・プライスがフェリックス・アンガー（潔癖症の方）を演じました。私たちは本番開幕の前のリハーサルに、何人かを招いて見てもらい、シャーウッドと私は私たちが意図した笑いの全てを得ることはできました。しかし、私は満足しませんでした、私たちはニール・サイモンの描く人物の中まで入り込んでいないと感じたからです。

衣装を着ての最後のリハーサルが近付いたとき、私は劇の通し稽古をドラマのようにやることを提案しました—この追加で；私たち二人だけになる、どのシーンでも互いに目を合わさないことにしました。実質的には、私は受け身的な心理描写ジェスチャーを提案していたわけです。そしてそれはとても上手く効果が出ました。その時から1ヶ月の公演を通して、私たちは観客が喜び理解する、複数の段階からなるニール・サイモンのコメディをカーテンコールで演ずることができたのです。

演ずるといふ芸術は、私にとって永遠に魅惑的なものです。しかし、舞台や映画での成功はしばしば、もう少し本質的な物に比べると芸術や技能とさえも関連しないことがあると認めざるをえません。

1960年の夏、ジム・コバーンと私が「橋からの眺め」のリハーサルをしていた時、私たちはある演技のことで言い争いを始めました。彼は言いました、「ステラが言ったことを思い出せよ、ボビー」。彼はステラ・アドラー、彼の演技のコーチで、ある時はガールフレンドであった（ブランドのでもありました、とりわけ）彼女のことを言っていました。

「彼女がなんて言ったって？」

ジムは答えました、20歳代後半に、パリのスタニスラビスキに学んだ後、ステラはグループシアターの未来のメンバーに、先生が彼女に、俳優にとってある一つの質が他のなによりも大切であると語った、と。

「それで、それは一体どういう資質なんだい？」とさらに尋ねました。
ニヤッと笑ってジムが答えました。「うっとりさせる魅力 (charm)」と。

ステラは正しかった。

1956年の3月から12月の間においては、プレーヤーズ・リングで演技指導一とらえどころのない、しかしとても重要な魅力の質をなんとか伝えようとしていました—その傍ら、私はとてつもない量の演技をこなしました。これがもう近い将来徴兵される前の、わたしのキャリアを広げる最後のチャンスであると、知っていたからです。ですから、テレビ番組と映画の出来るだけ沢山の役をスケジュールに詰め込みました。ここにそれらのいくつかを述べておきます。

1956年7月、カリフォルニア、バーバンクのNBCスタジオでのカラーのライブショウ「デクラレーション」でヴィクター・ジョリーに次いで2番目の序列で出演しました。それは保守派の父と改革派の息子についての話で、「昼の劇場」のために書かれた1時間番組でした。ラモン・ジョンソンが監督し、月曜日から金曜日まで毎日お昼に放送されたネットワークで唯一のライブカラー番組でした。この番組は「嵐が丘」を脚色したものかNBCのために現代的に書かれたものだったようです。

「デクラレーション」での私の役は、母の興味を引きました、何故なら長い間、私の父親はヴィクター・ジョリーではないかと母を冷やかす人がいたからです。確かに母はヴィクター・ジョリー、彼は「風と共に去りぬ」の役で今日まで良く覚えられていると思います、と共演したことがありました。そしてある人は、私と彼に似ているところがあると言っていたのです。しかし、タイミングがありません—私の父は、実際のところも、の父です。ですから「デクラレーション」をやることに、なんのエディプスコンプレックスもあり

ませんでした—ライブTV時代に一人の若い俳優が腕を磨くための、もう一つの良い役と言うことだけでした。

映画での私の最初のスターとして配役されたのは「ヘルズ・クロスロード」で、ステファン・マクナリーとペギー・キャッスルが主役の映画でした。私はボブ・フォード、ジェシー・ジェームズをかれが絵をかけている時に後ろから撃った「汚い小心者の嫌な奴」でした。ジェシー・ジェームズはヘンリー・ブランドンという俳優が演じました、彼は舞台「ミッディ」でジュディス・アンダーソンの相手役をやっていました。ヘンリーはマーク・ヘロン（前のトルーマン・ヘロン）、私のLACC時代からの長い付き合いの友人、と仲がよかったです。

マークは今ではジュディー・ガーランドの4番目の夫（つまり最後から2番目）として一番記憶されています—ということは、ジュディー・ガーランドが望むことはなんでも叶えてあげる役をしなければならなかったのだと、推測します。でも私が彼について一番覚えているのは、次に述べる出来事です。

60年代初期のある夜、私は、ビバリーヒルズのビバリーヒルトンホテルで行われた、ブラックタイの盛装ディナーに出席しました。私は、一人で行きました、それは、当時の私には珍しいことではありませんでした。その夜は、何かのチャリティーイベントで、一番の注目は最も熱い話題（バートンが彼の最初の妻シビルと、リズがエディー・フィッシャーとまだ結婚しているときに、クレオパトラ撮影中の恋で国際的に報道され）のエリザベス・テーラーとリチャード・バートンの登場でした。

指定されたテーブルに向かっている時、誰かが「ロバート！ロバート！こっちだよ！」と私の名を呼ぶのが聞こえました。それがマーク・ヘロンで、アルコールですっかりおしゃべりになっていたジュディー・ガーランドと一緒にいました。私は、ジュディには前に会ったことがありました。私の家のゲストにきたことがあり、彼女のMGMでの良き時代の話語りまくっていたのです。（彼女ははずば抜けて素晴らしい語り手でした）。そして今、彼女はマークに私が彼らと一緒に座るように頼めと言い、私はそうしました。

世界中の報道関係者が、新聞も写真も来ていました。彼らはメインテーブルから遠く離れたヒルトンの警備がパトロールする場所に封鎖されていました。

私たちが話をし、ジュディーは、飲み続け、騒々しさが増していき、テラーとバートンが到着するころには馬鹿騒ぎの頂点に達していました。テラーを見ると突然叫んだのです「ほら、彼女が来たわ！ミスMGMの小娘よ！」そして更に「彼女と一緒にの奴を見て、才能もない、鼻声で、あばた顔のウエルズ野郎よ！」と。

全ての言葉が大声ではっきりとしていました。マークと私は彼女をやっと座らせ、なんとか静めました。

パーティーはちょっと上品な雰囲気が進められ、いよいよスピーチと発表がはじまろうとする直前、オーケストラがスローなダンスミュージックを演奏し始めました。ジュディーは興奮し、「ロバート、ロバート私と踊らなきゃだめよ。絶対にダメ！」と言い始めました。私は色んな理由から断ろうとしました。しかし、彼女のお願いはどんどん手に負えなくなり、ついにはマークが（此の時には彼は豚のように汗だらけでした）「ロバート、頼むよ、これで彼女静まるかもしれないし、いや、気を失ってくれたらもっといいんだけど」と嘆願したのです。

私はその厄介な申し出を受け、ダンスフロアーへと出て行きました。一分もしないうちに、予期せぬ圧力、ちょっと恐ろしい圧力をデリケートな部分に感じました。ジュディーはヴォーン家の宝物に彼女の右手を伸ばしていたのです。私はとても困惑し、最初に思ったのは「この写真家たちがどうか見ないように」ということです。しかし、そんなことはあり得ません。フラッシュライトの嵐で突然見えなくなりました。私がジュディーをテーブルに連れ戻そうとしている間も、フラッシュの嵐は数分間続きました。

翌週、私は新聞・雑誌を心配しながらあのダンスフロアーでの驚くべき出来事が載っていないか探しました。しかし、私の知る限りはそれが載ることはなかったのです。何故かは誰のみぞ知る、です。多分世界の編集者たちにはまだ良心があり、可哀そうで可愛いジュディーに対する同情のひとかけがあったのだと、思いたいところです。まだこの産業の良い時代だったということでしょう。ジュディーは60年代が終わる前に旅立ってしまいました—恐らく、自殺でしょう。

補足ですが：数年後、マークは私の結婚式にやって来ました。披露宴の間、彼はゲイだけが切り抜かれるような種類のジョークを言いました。「ねえ、ロバート」「君は「欲望と言う名の電車」をやるべきだよ。」

私は光栄に思いましたが、異議を唱えました「どだろうね、あの役は余りにもブランドの物だし。。。」

「いや、いや」ヘロンが言いました。「僕は君がランチをやるべきだと言っているんだ。」

1956年に戻りましょう。2本目の映画の仕事はアライド・アーティストの仕事で

「未婚の母」というタイトルでした、50年代後半という時代にしては挑発的な題名でした。ティモシー・ケリー、スタンレイ・キューブリックの「栄光への道」にカーク・ダグラスに次いで2番目の名前の載った俳優、が主役でした。ティモシーは中絶手術を行う医師の役（当時としてはかなり驚くこと）を演じました。彼が出番に安物のダークスーツに身を包みセットにやって来て、彼の黒の医師のかばんを開け、そこからなにやら醜い、下品なナイフ、ハンマー、その他トリプルXホラー映画でしか見る事の無い物を取り出しました。このかばんは小道具係で用意したもので、台本に書かれているものでもなかったのです。全てはティモシーのアイディアで、それを彼のシーンで使うことについて、監督を説得しなくてはなりませんでした。監督はそれを使うなら、首にする、そして可能なら俳優組合から除名すると脅していました。最後には彼はしぶしぶ同意しましたが、その後彼のことは、あまり聞くことはありませんでした。

入隊の前の私の最後の映画は皮肉なことに、軍隊にどうしても入りたくない青年の話でした。以前に述べたとおり、ランカスタープロダクションから私をコロンビアに貸し出した映画で「ノータイム・トゥービー・ヤング」という映画です。私の実際の感情が演技をさらに色づけたのは間違いないでしょう。

最後にCBSの30分ドラマ「テレフォンタイム」シリーズで、「コンソート」（女王の配偶者）に出演しました。ジュディ・メディスの演じたヴィクトリア女王の愛人で、ドイツ人のいとこプリンスアルバートを演じました。ジュディは、のちに記者たちが俗に言うジョン・F・ケネディの「近しい友人」と

なります。（実を言うと、マサチューセッツの上院議員がホワイトハウスに到達する頃には、L. A. の何人かの若い美女たちが、大統領室の格好良く、ハンサムな人と真剣に浮気したと主張していました。）

ジュディは、私が未来の大統領と分かち合ったもの（政治的な立場も含めて）の一つです。彼女はナタリーが私に紹介しました、ナタリーは私が彼女の友人と一緒に時を過ごしても、全く問題にしなかったのです。それが当時、少なくとも私が交際していた若い仲間の間でのハリウッドの自由で気楽な慣習だったのです。

そしてビバリーヒルトンで、私がジョイス・ジェイムソン（彼女についてはもっと後で）を伴って出席した、ある夜の出来事があります。このチャリーテイイベントは伝説的なハリウッドの司会者、ジョージ・ジェセルが司会者として協力を頼まれていました。

年齢を感じさせないジェッセルは 20 世紀初頭からショウビジネスの世界に身を置き、ボードビリアン、俳優、歌手、作曲家、そして劇場、映画プロデューサーとして活躍してきました。晩年は街の女性をエスコートしていない時はニューヨークやロサンゼルスフライアーズクラブで有力者と親しく過ごすか、どんなイベントでも考えられるイベントはほとんどオハイオのアクロンで行われるエルクスの大会にいたるまで、全てコメディ司会者として仕事をしていました。ジョージは誠実で高潔な人間でした：彼は常に報酬のある仕事であればなんでも対応していました。

この夜のヒルトンでの最後のゲストスピーカーは、ジャック・ワーナー、30年代から数々の名画をプロデュースして、ハンフリー・ボガード、ローレン・ベイコル、ジェームズ・ギャグニー、ベッティ・デービス、エドワード・ジー・ロビンソンなどなど数々のスターを生み出したワーナーブラザーズの伝説の偉大な代表です。彼は鉄の腕と節約予算で君臨してきました。そしてその鉄の腕が撮影所で石から血を絞り出していないときはその手はジョンバーリコン（モルトウィスキー）で震えているのをしばしば見られていました。そして、この夜がそうでした。

ワーナーはくだらない昔話やおもしろくもないジョークを延々と話しつづけました。さらにスピーチが続くにつれ、観客、Aリストの人たち、ロザリン

ド・ラッセル、カーク・ダグラス、ジャック・レモンそしてグレゴリー・ペックからAリストの人たちで、埋まった観客がだんだんと落ち着きがなくなり、あきあきとし、苛立ち、ついには怒りだしました。

やっとワーナーがありがたいことに終わり、席に着いたときには礼儀正しい表面的な喝采が起きました。(結局、彼はまだショービジネスでは最も権力のある人物の一人だったのです。)

ジェッセルは演壇に上がり、彼の左に座ったジャックをしばらく厳しく見つめ、ついにコメントしました。「ジャック、一体どうやってスタジオのトップになれたんだい？」と。

その場は一瞬静まり返り、その会場中の要人たちの呼吸が聞こえるくらいでした。そして、ジェッセルが彼らを解放したかのように観客は爆発したのです。スターたちは叫び、野次をとばし、爆笑し、お皿を鳴らし、立ち上がって喝采を送りました。そして、ジャック、全く無神経である彼は、また立ち上がり、何度かお辞儀をし、大きな笑みをうかべ、葉巻を持った手を何度も振ったのです。私が想像するには、ジャックの曇った見解からすると、この夜の彼のスピーチは大成功となっているのでしょう。

1965年12月に徴兵されるまでには、実は私はすでに陸軍予備軍で何度か奉仕していました。どうしてそうなったかと言うと。

1953年7月27日、南北朝鮮の停戦条約が調印された頃。私の友人で陸軍予備軍の大佐が、6年間の予備軍にはいないかと誘ってきたのです。

「何故そうしなければいけないの？」と説明を求めました。

「もし君があとで徴兵されたときに卒業単位を修得していれば、君をすぐに少尉にしてあげられるよ。つまり、基礎訓練を避けることが出来るし、2年間を君の知性と円熟みに見合った仲間と過ごせることになる。」

まあ、これは少々おいしい話に聞こえ、酔っぱらったときのように、その時は良い考えのように見えたのです。そうして、何が先に私を待ちかまえているかも知らずにサインしたのです。

しかし今3年以上も経過し、もはやこれ以上実務訓練を伸ばすことは出来なくなりました。(エルビス・プレスリーでさえも徴兵されることになりました)。私の徴兵書類の職業欄には「映画スター」と記入されてましたが、もちろんその当時はまだ私はスターではありませんでしたし、しばらくはそうなりそうもありませんでした。1956年12月18日、黒のサテンのライダージャケットに黒のコーデユロイパンツそして黒のレザーブーツを身にまとい、1956年12月18日、私はカリフォルニア、オード基地にむけ、8時間のかかるグレイハウンドバスに乗り込みました、アメリカ陸軍での2年間の任務に付くためにです。スターの芽が出始めた輝かしい夏が永遠に過ぎ去ったのを確かに感じ、私はとてつもなく沈み込みました。